

iBook「はらぺこあおむし」を取り入れた実践の効果 ～ 絵本読みにおける音読時間及び誤読数の変化を基にした事例的検討 ～

葛西 美紀子 (弘前大学教育学部附属特別支援学校)

本実践は、ダウン症の児童を対象とし、誤読の改善を目的として電子書籍を導入した取り組みである。対象児童は、音読活動において、平仮名の読み書きはできるが拗音や促音の読みはまだ十分ではなく、文字を飛ばしたり足したりして思い込みで読んだり(勝手読みという)、長文になると行を飛ばして読んだりすることがある。導入した電子書籍は、文節毎にハイライトして示され、読み飛ばしのある対象児童にとって、文字、文節、段落を意識しやすいものとなっている。実践では、対象児自らが週2～3回10分間電子書籍を用いて音読を継続した後に、絵本読みでの音読時間と誤読を計測した。その結果、誤読の中でも助詞の読み間違いは若干残ったが、1ヶ月間の取り組みで、限定した部分においては6分の1以下の時間で読めるようになり、誤読数は5分の1に減少したことから、対象児童にとって音読時間及び誤読の改善のために電子書籍の導入は効果的であったと推察される。

キー・ワード：iBook iPad 勝手読み 音読時間 誤読数

I. 対象児童

1. 学年

小学部 6学年男子(T君)

2. 障害および実態

T君はダウン症の児童で、IQ35(H24, 11月実施)、発達年齢は3才10ヶ月である。

話し好きであるが、思ったことを整理して話すことが難しく、話しが長くなる傾向がある。緊張した場面では、話し始めに吃音が出ることが多い。

平仮名の読み書きをようやく覚え、訥々とはあるが、短い文や絵本などを読めるようになっている。

拗音や促音の読みはまだ十分ではなく、その部分になると止まったり援助を求めたりする。また、文章を読み進めていると、単語の最初の文字を見て、文字を飛ばしたり足したりして思い込みで読む(勝手読みをする)ため読み間違いが多い。

昨年度から、昼休み時間にiPadやiPhoneで平仮名の読み書きやパズル等のアプリで遊んでいた経験がある。

II. 実践の内容

1. 題材「はらぺこあおむし」について

(1)「はらぺこあおむし」が、毎日食べ続け、きれいな蝶に成長する展開が分かりやすい物語。

(2)22ページで構成され、平仮名(片仮名にはル

ビ付き)で書かれている。

(3)1ページあたりのセンテンスが少ない。

(4)iBook「はらぺこあおむし」は、画像のように文節毎にハイライトして示される。ハイライトされた文字は赤で示される。

2. 実践の目的

予め「はらぺこあおむし」の絵本を読

んで音読速度と誤読のデータを取る。iBook「はらぺこあおむし」の視聴や復唱を繰り返し、再度、音読データを取り貯め、電子書籍を使用した練習の効果を確かめる。

3. 時間の設定

毎日1時間設定されている「国語・算数」の授業の中で、「音読」という指導項目で10分程度の時間を当てて実践を継続した。週5時間のうち2～3回、iPadを用いて電子書籍の音読活動を行った。

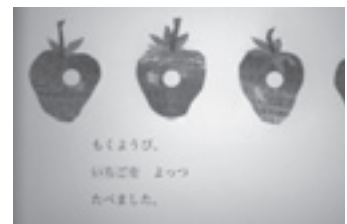
4. 音読時間の計測方法

(1)T君の好きなページを選択させ、読み終えるまでに要した時間を計測する。

5. 誤読数の計測方法

(1)1フレーズ内に2つの音の間違いがあっても1単語の誤読と見なす。

(2)省略して読んだ場合には、正規の文節数を誤読



数とする。

6. iBook の取り入れ方

- (1) ページ毎に、ハイライト箇所を見ながら朗読を聞いた後に追読する。
- (2) 追読に誤りが見られた時には、正しい読み方を指導し、同じページを再度追読する。
- (3) 絵本を音読し、前述4、5の計測方法で音読時間及び誤読数を調べる。

Ⅲ. iBook 活用の実際

1. 取り組みの様子

- (1) 電子書籍の「朗読を開始」をONにして、ハイライトに注目しながらじっくりと朗読を聞く。次に、音量を低くして、ハイライトに合わせて音読をする。
- (2) 直後に、「はらぺこあおむし」の絵本を音読する。

2. 結果

(1) iBook 「はらぺこあおむし」に対して

- ①絵を見てじっくりと朗読を聞き、自分でフリックしながら進めていくことができた。
- ②ハイライトのスピードに合わせて読み進めることは難しいが、一文字一文字丁寧に読み進めようとした。

(2) 言い回しの難しいことばの改善

Table 1 言い回しの難しいことば

絵本の表記	T君の言い方	回数※
ちっちゃな	ちいさな	7
あたたかい	あったかい	7
ちっぽけな	ぼっちかな	5
たべるもの	たべもの	8
さがしはじめ	さがしめ	8
はらぺこじゃ	はらぺこや	13
ふとっちょに	ふと・・・	10
ねむりました	ねむれました	9
さなぎの	ちいさな	5

※iBook「はらぺこあおむし」の題材を取り上げてから、絵本の音読で正しく読めるようになるまでに必要とした、授業時間における音読の回数

(3) 音読時間の変化

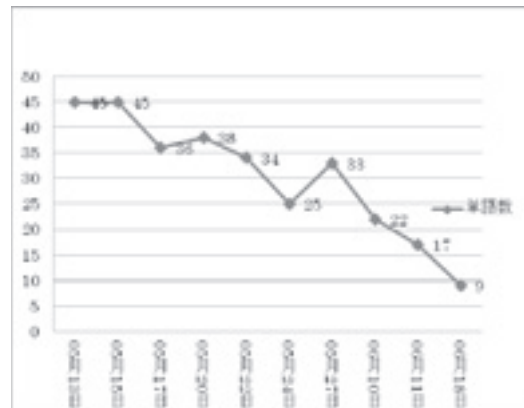


Fig. 1 「どうぶ」のページの音読時間の変化

(4) 誤読数の変化

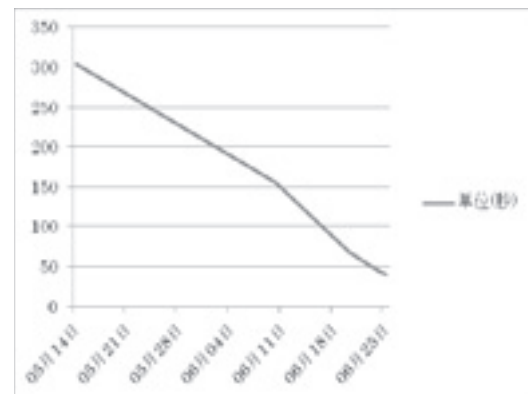


Fig. 2 誤読数の変化

(5) 他の読み違いの内容

- ①行とばし
- ②文字の省略
 - 例) みつけてたべました→みつめました
 - いいました→いました
- ③助詞の省略 例) 「は」「を」
- ④前述の助詞を省略し後方の単語に付ける
- ⑤助詞の置換え
 - 例) あおむしの→あおむしは
- ⑥大文字と小文字の見間違い
 - 例) いつつ→いつ
- ⑦勝手読み
 - 例) ○○のです→○○ました
 - おひさま→おほしさま
- ⑧清音を濁音で読む
 - 例) また→まだ

3. 音読時間・誤読数の変化とT君の変容

- (1) iBookの使用後早い時点で行とばしや勝手読みは減少したが、Table 1より、長いフレーズ(みつ

けてたべました さがしはじめました etc.)の言葉や日常的に使い慣れない言葉(はらぺこじゃふと っちょ etc.)を読み慣れるまでには時間を要した。

(2) 音読時間の計測について、T君は3センテンス、20フレーズの比較的読みの量の多い「どようびの…」ページを選択した。食べ物の種類が多く、言い回しのおもしろい言葉が多いとの理由であった。Fig. 1より、一字ずつ拾い読みをしていた最初の頃と比較すると、約1ヶ月で6分の1以下の時間で読めるようになった。

(3) 週明けには、2～8個程度誤読が増加する傾向が見られた。Fig. 2より、全体的にみるとiBookを継続して使用した結果、誤読数が約1ヶ月で5分の1に減少した。

(4) 拗音や促音の読みを苦手としているため、その部分では慎重になり間違わないようにペースを落として音読していた。音読の滑らかさは欠けるものの単語のまとまりで読めるようになった。

(5) 長いセンテンスでは、読んでいる箇所の上や後方にある助詞に影響されることが多く、助詞の読み間違いが依然として残った。

IV. 成果・課題と展望

1. 成果

T君は、絵本への関心が強く好んでよく見ている児童である。絵本が電子化されることにより、絵本のページをめくる感



覚とはまた違った感じ方で、楽しみながら音読をしたり読解をしたりするようになった。

iBookの使用により、いつでも読み方の手本を聞くことができ、音読活動を主体的に行うことができるようになった。誤読数が減少し音読の正確さが増加したことに加え、今では挿し絵を楽しみながら音読をする余裕も出てきた。

実践開始時、T君はiBookの読みのペースに合わせて音読することが難しかったため、「ふつう」と「ゆっくり」の朗読のペースの違うものを用意し、実践では「ゆっくり」タイプを使用した。実践終盤になると、

T君は読みに自信が出てきて自分から「ふつう」タイプを選択し、スピードに合わせて音読できるようになってきた。

T君が6年生になって間もない5月中旬から約1ヶ月間、取り組みを行った。「はらぺこあおむし」の限定した部分では6分の1以下の時間で読めるようになり、誤読数は5分の1に減少した。電子書籍を導入したことは、T君にとって、読み方の指導や誤読の改善のために有効的であったと推察できた。

2. 課題

実践において音読練習を積み重ねたが、T君は、依然として助詞の部分での若干の誤読・置換えが見られている。今後も、教科指導や日常生活の中で「助詞」の使い方の指導を継続していく必要がある。

3. 展望

iBookを日常生活や学習場面に取り入れることの一歩の目的は、誤読数の減少や音読の正確さよりも子ども達がこれまでよりも、一層、本に携われるように、読書環境を整え、読書経験を豊かにしてあげることであると考えている。

子ども達からの要望を取り入れ、状況に合わせてよりたくさんの電子書籍を生活環境に整えてあげたい。

(付記)

本実践の一部は、大妻女子大学社会情報学部プロジェクト研究(代表 生田茂教授)、同人間生活研究所プロジェクト研究の協力によるものである。

(参考文献)

デージー活用事例集 公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会(2013 3月発行)